
茜雫が主役

D a i s y K a t s u r a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

茜雫が主役

【コード】

N3071B

【作者名】

Daisy Katsura

【あらすじ】

BLEACHの話を登場人物改竄かいざんしてやってみました。

(前書き)

BLEACHの話を、登場人物だけ変えたらどうなるだろうと思
ってやってみました。

映画の事もあってか、茜雫^{せんしほ}を主演にさせて頂きました。

ジャンプコミックス一巻掲載の話をしながら読んで頂けると、よ
り一層楽しめるかと思えます。

茜雫が主演

後ろ髪を赤いリボンで結んだポニーテールの少女。彼女の名は黒崎^{くろさき} 茜雫。見た目は至って普通の高校生。しかし、彼女には他の人と違う所がある。それは、幽霊が視えると言う事。

彼女の家は葬儀屋で、死体を扱っているせい、物心ついた頃には、霊が視える様になっていた。

「ただいまあ」

と、中に入ると、茜雫の父・黒崎^{くろさき} 一心が跳び蹴りを放って来た。「遅ーい！」

ボグッ！ 茜雫は勢い良く吹っ飛んだ。

「今何時だと思っただこの不良娘！」

ウチの夕食は毎晩決まっとるだろうが！」

「てめえっ、これが必死こいて除霊して帰ってきた娘に対するアイサツか！」

と、一心に眼を付ける茜雫。

その茜雫に一心は、

「やかましい！」

どんな理由があろうと我が家の鉄の団欒^{だんらん}を乱す者には血の制裁を下すのみ！」

と、眼を飛ばし返した。

「それとも何か？」

また自分だけユウレイに触ったり会話したり出来る事を暗に自慢してんのか！？

羨ましいんだよてめえ！」

「うっせえな！」

私だっけ好きこのんでこんな体質に生まれたんじゃない！」

そう口喧嘩をする二人の傍らで、妹のユズがこう言った。

「も やめなよ二人ともー。ゴハン冷めちゃうよー」
それに対して、

「ほっときなユズ」

と、双子の姉・夏梨かりんがお茶碗を差し出しながら言った。

「大体この家はルールがキツすぎるんだよ！

どこの世界に健全な女子高生を毎日7時に帰宅させる家が・・・」

茜雫が言い終える直前に、

「お姉ちゃん、もう新しい人憑いてるよ」

と、ユズがかき消した。

「ああつ、こいつ何時の間に！」

茜雫は慌てて被いながら、

「被っても被ってもすぐコレだ！畜生！」

と、文句垂れた。

そんな茜雫の傍らで夏梨は箸を銜えながら、

「視える触れる喋れる上に超A級霊媒体質れいはいの四重苦よんじゅうく。

大変だねえ、茜姉せんねえはハイスペックで」

「でもさー、ちよつと羨ましいよねえお姉ちゃん。

あたしなんかボンヤリとしか視えないもん」

「別にあたし幽霊とかそう言うの信じてないから」

そう言って、味噌汁を飲む夏梨。

「えーっ、でも夏梨ちゃんだって視えてるんでしょ？」

「バカ。」

視えようが何しようが信じてなけりやいないのと同じ。

それよりさ、新しい企画考えたんだけど聞いて」

その言葉に、ユズは耳を傾けた。

「”初夏の風と共にユウレイと戯れてみませんか” 5月限定企画<

軽井沢ゴーストピクニック>」

「先月はお花見だったね」

「夏梨っ、私でお金儲けしようとするな！」

と、茜雫は夏梨に怒鳴った。

「スキありイ！」

一心はスキを見せた茜雫にのし掛かった。

？ 一心が頭に？を浮かべた瞬間、茜雫は一心を放り投げた。

「もう良いっ、寝る！」

そう言っつて、茜雫は二階に上がって行った。

「あっ、お姉ちゃん！」

「あーあ、行っちゃったよ。お父さんのせいだからね」

夏梨にそう言われ、

「な・・・なんでだよウ！」

と、一心はオドオドしながら言った。

その一心にユズは、

「お姉ちゃん最近大変なんだからね！」

前より沢山霊が寄ってくる様になっただって困ってるんだから！」

「何っ、あいつお前にはそんな事まで話すのか!？」

「後で部屋にゴハン持ってってあげよつと」

「あいつめ・・・父さんには悩みなど話してくれない癖に・・・」

「当たり前だわ。」

40過ぎてまでこんな幼稚なコミュニケーション手段しか持たん様な父じゃあたしだって悩みなんか相談しないっての」

夏梨そう言われ、すっかり落ち込んだ一心は、今は亡き妻・真咲の遺影に向かって、

「母さん・・・この頃思春期なのか娘達がヤケに冷たいよ・・・一体どうしたら・・・」

「先ずそのアホみたいな遺影を剥がすところから始める」

パンツ！ 茜雫は1007と書かれた部屋の扉を閉めた。

「全く・・・ウチの連中はどうしてこう揃いも揃って・・・」

その時、黒揚羽くろあげはが一匹、目の前を通った。

「黒揚羽？」

「こいつ、どこから・・・」

そう眩き、茜雫は揚羽が飛んで来た方を見た。
すると、机の上に黒い死覇装に背中に刀を担いだ男が立っていた。
そいつは机から降りると、

「近い……！」

「近い……！じゃあるかボケエ！」

茜雫はそいつの背中を蹴り飛ばした。

茜雫はそいつを指差し、

「随分堂々とした泥棒じゃねえか、あア！？

近い……！てのはアレかつ、金庫が近いとかそう言うアレか！」

その言葉に、男は？を三つ頭に浮かべた。

「お……お前……俺の姿が視えるのか……？」

て言うか今蹴り……」

「何訳のわかんねえ事言ってたんだ？」

そんなもん視えるに……」

そう言い掛けた時、

「うるせえぞ茜雫っ、二階でドタバタすんなア！」

と、一心が扉を開け、飛び蹴りを放って来た。

「やかましい！これがドタバタせずにはいられるか！」

そう言って殴り返す茜雫。

「見るコイツをつ、この家のセキュリティはどうなってんだ！？」

茜雫は男を指差しながら言った。

「見ろつて、何を見るんだ？」

「あ？」

何つてこのサムライ姿の……」

「常人に俺の姿を見る事は出来ねえ。

俺は……<死神>だ」

茜雫は腕を組みながら、

「つまりあんたは死神で、その尸魂界とか言う所から遙々悪霊退治
ソウル・ソサエティ

にやって来たって訳ね……。

よしっ、信じよう！」

その後、暫く沈黙が続くと、

「って、信じられるかボケエ！」

と、茜雫は卓袱台返しをした。

「貴様……幽霊が視える癖に死神の存在は信じねえのか！」

「当たり前だよ。」

生憎今まで死神は一回も見た事が無いんだよ。目に見えないものは信じない主義なんだ。

親父には視えてなかったし、あんたが人間じゃないってトコまでは認める。但し、死神ゴツコはヨソでやりな。わかつたな糞餓鬼」

茜雫にそう言われ、男は力チンツと来た。

「ほざきやがって……」

男はそう呟き、

「縛道の一、塞！」

と、茜雫を金縛り状態にした。

「痛いっ、何コレっ!？」

「あんた私に何したのっ!？」

男は茜雫を片足で踏みつけ、

「動けねえだろ！」

こいつはく鬼道きどうと言つてな、死神にしか使えない高尚こうしょうな呪術だ！

俺はこう見えても貴様の10倍近く生きている。それを糞餓鬼だと？

本来ならためえの様な輩は殺してやるが、一応靈法で指令外の間を殺してはならぬ事になっていてな。そうして動きを封じるだけで勘弁してやる。感謝しろ糞餓鬼」

「コノヤロウ……」

「それから……」

男は突然、刀を抜き、その柄つかを茜雫に憑いている霊に当てた。

「い……嫌です私は……地獄へはまだ逝きたくない……!」

「憶するな。お前が向かう先は地獄じゃない。尸魂界だ。地獄と違
って気安い処だ」

男がそう言うと、霊は光に包まれて消えた。

「……………ど……………どうなったんだ？今の奴……………
」

「ソウル・ソサエテイに送った。＜魂送＞と言う。こっちの言葉で
はく成仏＞と言ったか。死神の仕事のうちの一つだ。

信じる気になったかどうかは訊くまでも無い様だな。

貴様の様な短慮な餓鬼にも得心がいく様易しく凶解してやる。黙
って聞け」

そう言って、男は懐からペンと紙を取り出した。

「いいか、この世には二種類の魂魄がある。一つはく整＞と呼ばれ
る通常の霊。

貴様が普段目に行っているユウレイがこれだと断言している。

そして今一つが、＜虚＞と呼ばれ、生者・死者の別無く襲って魂
を喰らう。所詮悪霊だ」

そう言って、男は紙に理解に苦しむ絵を描いた。

「ここまでで何か質問はあるか？」

「えーっと、取り敢えずあなたの絵が異常に下手な理由からきこつ
か」

茜雫がそう言うと、男にペンで顔に落書きされてしまった。

「ああっ、私の美貌が！」

「説明を続ける。」

我々死神の仕事は二つ。一つは整を先の魂送で尸魂界に導く事。

そして二つ目が、虚を昇華・滅却する事だ。

今回の俺の任務はこれにあたる」

「ちよつて待て。あんたがその任務でここに来たって事は、その虚
つてのは今この近くにいてるって事？」

「そうなる」

「バ…………ツ、バカかあんた！？しゃあなんでこんなトコウロウロ

してねえでささつとソイツ片付けに行けよ!」

「イヤ・・・それが・・・先程からどう言う訳か、そいつの気配を全く感じなくなってるんだ・・・」

「な・・・何だよソレ。どう言う・・・」

茜雫が言い掛けた時、どこからか雄叫びの様なものが聞こえて来た。

(な・・・何だ・・・?今の・・・)

「まるで何か大きな力に感覚を阻害されている様な・・・」

「おいっ、死神っ!」

「何だ?」

「何だじゃねえ!今のスゲー声、聞こえなかったの!?ありや一体何の声!?!」

「凄い声?そんなものいつ・・・」

と、その時、再び雄叫びの様なものが聞こえて来た。

(聞こえた!これは・・・間違い無く虚の声!)

だが、まだ何か・・・見えないフィルターが掛かった様に聞こえる・・・。一体何なんだこの感覚は!?

いや、それよりも こいつは この声に死神の俺よりも早く

気付いたと言っのか・・・!?!)

「きゃあっ!」

家中に悲鳴が響いた。

「遊子ユズの声だ・・・!」

死神は慌てて駆け出した。

「おいっ、待てよ!どこ行く!?

さっきの音が虚つてのの声なのか!?

「そっだ!

俺が片付けて来る!お前はここにいろ!」

「バカ言えっ、襲われてんのは私の家族だぞ!? 解けよこの術! 早く!」

「何を言っつてやがる!?! お前が来ても役に立たねえ! 死人が一人増

えるだけだ！俺に任せて大人しくここに居ろ！いいな！」

死神はそう言い、扉を開けた。

その瞬間、死神は驚いた。

（な・・・何て言う霊圧！これに今まで気付かなかったとは・・・
・俺は一体どうしちまつたんだ！？）

「・・・せ・・・茜姉・・・平気・・・？」

「夏梨！」

「よかった・・・こつちには来てないんだ・・・」

・・・突然なんだ・・・突然お父さんが、背中から血・流して倒れて・・・

あたしもユズも、吃驚してる間に何かでつかい奴に襲われて・・・
それであたし、茜姉に知らせなきゃって・・・思ってた・・・
何なんだろうアレ・・・あたしには少し視えてたけど・・・父
さんもユズも視えてないみたいだった・・・

・・・茜姉は・・・あいつに見付かる前に・・・早く・・・
・・・逃げなよ・・・」

そう言い残し、夏梨は気を失った。

「大丈夫。気を失っただけだ。魂もまだ」

死神がそう言うと、茜雫は無理矢理立ち上がった。

「よせつ、何してる！？やめろ！それは人間の力では決して解
けん！無理をすればお前の魂が！」

死神がそう言うと、茜雫は目の前で、自力で鬼道を解いた。

（バカな・・・人間が鬼道を自力で解くだと・・・？そんなバカな
話聞いた事無え・・・！）

茜雫は金属バットを持って階段を駆け降りた。

「待て！」

しかし、茜雫に死神の声は届かなかった。

（奴は、一体・・・！？）

（遊子っ、親父！）

「ちょ……ちょっと待てよ！」

虚つてのは魂を食う為に人を襲うんじゃないの！？それじゃ、あいつは何の為にウチの連中を……」

「……虚はより霊的濃度の高い魂をもとめて彷徨っている……。その為に無関係な人間を襲うと言うのは間々ある事だ」

「……どう言う……」

「俺は死神が視え、鬼道を自力で破る人間なんて……それ程に霊的濃度の高い魂を持った人間なんて……今までに見た事も聞いた事も無かった……」

恐らく奴の狙いは　お前だ！」

「……ちよつと待て……私を狙ってる？それじゃ、これは私のせいだつて事か？」

親父がそこで死に掛けてんのも……夏梨や遊子が血だらけになつてんのも……全部……」

「待て、俺は別にそんなつもりで……」

ズガンッ！　死神は背後に迫る虚に吹き飛ばされた。

「……死神……！」

虚は茜雫に迫る。

その虚に茜雫は、

「……いい加減に……しやがれ……！」

と、怒鳴りつけた。

「くっ、敵前で背後への集中を怠るとは……迂濶だった。無様な……」

……」

そう言った後、死神は驚いた。

「あなた……私の魂が欲しいんだろ……？」

だったら私とサシで勝負しろ！他の連中は関係ねエ！私を殺して

奪えよ！」

茜雫はそう虚に怒鳴りつけた。

「ばか！」

死神は虚の前に立ちほだかり、茜雫が喰われるのを阻止した。

死神は虚に噛まれ、血まみれになった。

「　　な．．．．．」

「貴様の力では敵わんと言う事は先刻承知済みだろう．．．！それとも自分の魂さえくれてやれば全て済むと思っただか．．．どちらにしろたわけだ．．．！」

「．．．．．悪かった．．．．．私ほただ．．．．．」

「気にするな．．．．．と言いたところだが．．．残念ながら今の俺では奴とは戦えそうも無い．．．．．このままでは全員．．．奴の餌食になるのを待つばかりだ．．．．．」

（私のせいだ．．．）

ガシッ！　茜雫は地面に拳をついた。

（みんなやられちゃう．．．！）

「．．．家族を助けたいか．．．？」

死神はそう訊ねた。

「あるのかつ、助ける方法が！？教えてくれ！」

「一つだけある．．．いや、正確には．．．一つしか無いと言うべきか．．．」

と、刀の先を茜雫に向ける死神。

「お前が．．．．．死神になるんだ！」

「何言つてんだ．．．そんな事が．．．」

「出来る！」

お前が斬魄刀を胸の中心に突き立て、そこに俺が死神の力の半分以上を注ぎ込む！

そうすればお前は一時的に死神の力を得．．．奴とも互角に戦える筈だ！」

「そんな事をして本当に．．．大丈夫なのか．．．？」

「知るか！」

勿論てめえの霊的資質の高さを見込んでの計画だが．．．成功率は低い。失敗すれば死ぬ．．．！」

だが、他に方法が無い！迷ってる暇も無い！」

死神の言葉に茜雫は考えた。

「……おねえちゃん……どこ……？……おねえちゃん……」

と、遊子の呟き声が聞こえた。

「……遊子……怖い夢でも見てるのか……」

「来ちゃ駄目……危ないよ……早く逃げて……」

その遊子の寝言に、

(どうしてウチの連中はいつもこいつも自分が死に掛ける時に私の心配なんか……。自分の事でビビってる私が……バカみたいじゃないか！)

茜雫は手を強く握った。

「刀をよこせオレンジ頭！」

「オレンジ頭じゃねえ。黒崎 一護だ」

「偶然だ。私は黒崎 茜雫。」

お互い最後のアイサツにならない事を祈るよ」

一護は刀を茜雫の胸の中心に突き立てた。

「……行くよ」

「……ああ」

グサツ！ 一護は刀を茜雫の胸に突き刺し、死神の力を注いだ。

その瞬間、茜雫は光に包まれ、その光の中で茜雫は死神になり、刀を振り回した。

すると、虚の左腕が切れて吹っ飛んだ。

そして、茜雫を包む光はやがて消えた。

「……バカな……半分のもりが……全ての力を奪い取られてしまった……」

一護はそう呟いた。

(しかもこの感覚は、あの時の……。あれはこいつだったのか！あの部屋にはこいつから発せられる霊圧が満ちていた……。それが俺の感覚をことごとく混乱させていたのか……！)

死神が視える人間など見た事が無い！

鬼道を自力で破る人間など見た事が無い！

個々の死神の霊力に呼応して姿を変える斬魄刀があんなに巨大になつたところも見た事が無い！

一護は目の前の出来事に驚いた。

「ウチの連中に手エ上げた罪を思いしれサカナ面！」

茜雫は巨大な斬魄刀を振り降ろし、虚を真つ二つに斬り裂いた。その様子を傍らで見つめる一護は、

（こいつは本当に一体、何者なんだ・・・？）

茜雫が主役

(後書き)

「護が」「黒崎」なのは「この際気にするな！」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3071b/>

茜雫が主役

2009年5月29日04時20分発行